

龍源寺報

令和3年 春彼岸号

臨濟宗・妙心寺派	住職松原信樹
佛母寺住職松原行樹	正福寺住職松原行樹
TEL	3451-1853
FAX	3451-6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com

URL: http://www.ryugenji.com

春彼岸におもう

生存競争の厳しい現実、勝つか負けるかの二者選択であって、その争いの勝利者には、今度は、より大きな課題と向き合う緊張の苦難があるし、敗北者にはみじめな敗残を生き、避けることの出来ない屈辱の運命が襲ってくる。そうした生死をかけた闘いが、私達の生活の中で何らかの形で出現してくる。しかし、そうした場面以外にも、私達にとっては、さまざまな問いかけとそれへの対応が拒否できない形で迫ってくる。そこでは、いつさいの逃げ口上や逃避の道は遮断される中に立たされる。自己をさらけ出し、自己自身であることの自覚を求められる。不安と苦しみを抱きながら、一歩先は闇であることを心得つつ、危ない、不確かな人生を歩む。こうしたことは、十年前の東日本大震災や新型コロナウイルスの感染症の経験を通して、築き上げられてきた豊かな文明の脆弱さを痛烈に感じさせられたことで多くの人の心の中に刻まれていることだと思う。ゲーテ著『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』収録の詩で、鈴木大拙が翻訳した詩をみてみたい。

悲しみの中にそのパンを食したることなき人は、
真夜中を泣きつつ過ごし、

早く朝になれと待ちわびたることなき人は、
ああ汝天海の神々よ、此の人は未だ汝を知らざるなり。
(鈴木大拙『禅の第一義』)

涙でパンを濡らすようにしてパンを食べたことのない人は／真夜中一人誰もいないところで、泣き続けたことのない人は／早く明日になれと待ちわびたことのない人は／それは、まだ、神々を知らない。つまり、悲しみを経験した人、真夜中を泣きつつ過ごした人、明日の朝を待ちわびた人朝にならなければこれ以上私は生き続けることが出来ない。そういうことを経験した人こそが、神々を本当に知った人である。苦しみや悲しみの経験というものは、とても大切で、それが私達を大切な所に導いてくれる。苦しみや悲しみの出来事を避けるのではなくて、受け止めてみるという選択があるのでないかということ、詩は提示している。否定的なものを、まるで無いかのように過ごしてしまわず、一見、否定的と思われるものの中に、大切なものを見いだし、コロナ禍という試練の時代だからこそ、私達は、本能的に何とかしなければならぬと考えるが、そこで安易に動くのではなく、自分が何者であるかということを考えるためにも、今、置かれた場所に存在するということをしっかり見極め行動に移したい。(信樹)

柳 緑

春彼岸会を迎えます。今年も境内の梅の花が満開になりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。高層マンション

花 紅

が建ち並ぶ港区において、寺院を地域の文化資源の一つとして捉え、

境内整備に取り組んでいます。また、新しい合同墓地の準備を進めています。皆さまのご協力宜しくお願い申し上げます。

▼本堂で年忌法要をされるお檀家さまに安心してお参りいただくため、本堂の窓を開け、消毒と検温とマスクの着用をお願いしています。お茶出しも中止にしています。また、坐禅会を除く全ての定例会を休会させていただいておりますが、様子をみながら再開できればと思っております。もう少し時間がかかるかもしれませんが、再開のお知らせはホームページでさせていただきます。▼母は弟の覚樹と茶道のお稽古を毎日しております。茶道は幼少の頃からで、きっと生活の一部になっているのでしょう。祖母から引き継いだ茶道の道を弟と家内が継承していくとは思っていませんでした。家内の亜

矢は、子育てとお寺の仕事と会社の仕事で忙しくしています。何でも一生懸命に取り組む性格です。共働きで慎ましく毎日を過ごしています。居間のリフォームが終わるまで、家内のピアノを応接間に置かせていただいております。法要や通夜葬儀の出棺の折、追悼としてピアノを弾かれる方は、お申し出ください。娘の瑞樹は、春で年中さんになります。お友達もできて、毎日楽しく幼稚園に通っています。今年五十になる私もたまに幼稚園の送り迎えをします。これは天が与えてくれた貴重な時間だと感謝しています。▼さて、彼岸会の行事は、いつからはじまったのでしょうか。彼岸会の史料に見る初見は、「桓武天皇が」崇道天皇の為に、毎諸国の国分寺の僧侶に春秋の二つの仲月にそれぞれ七日ずつ『金剛般若波羅蜜多經』を誦読させた」（『日本後紀』卷十三）とあります。また、禅宗においては、大休正念禅師の『大休和尚寿福寺語録』・彼岸上堂条に、「日本国の風俗、春二月・秋八月の彼岸修崇の辰有り」とあり、彼岸会は、日本独自の行事であることがうか

がえます。▼コロナ禍の中で、彼岸会の御齋のちらし寿司を中止しています。恐らく戦前から私の祖母の志ずさんが、お檀家さまの奥さまと一緒に始めたことだと思えます。そのようなことが出来ること自体大変貴重で素晴らしいことだと思います。将来家内も母から引き継ぐ意志があるので、新型コロナウイルスの終息後、開始しますが、しばらくの間、本尊さまと寺族で食する分は、寺族で引き続き作っていくこととおもっております。その背景には、泰道和尚が生前、「十二月一日の開山忌の行事で、事情があつて何も作れなくなったとしても、茶飯とけんちん汁とごま豆腐は作るんだよ」と言われたことによります。泰道和尚・志ずは、早いもので今年七月に十三回忌を迎えます。▼三月二十日（土）春分の日、春彼岸会を厳修致します。午前十一時から三十分の間にご焼香ください。外階段を使用してお焼香、もちろんエレベーターも使用できます。検温、消毒にご協力お願い申し上げます。皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

（信樹）

ご 寄 付

金三千円 中沢殿

金一万円 法師久恵殿

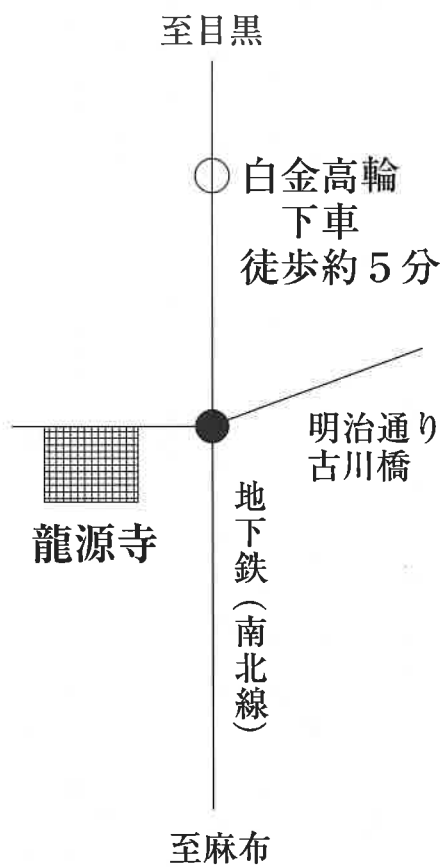
ありがとうございました

※大変貴重なご寄付をありがとうございました。龍源寺の周囲が再開発される中、龍源寺を地域の文化資源の一つとして考え、先代から引き続き、境内整備に力を注いで参りたいと思います。未熟者ですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

松原信樹

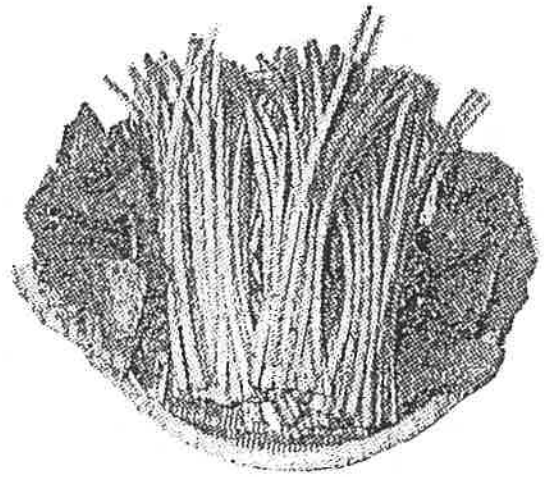
春彼岸会

- 一、三月二十日（土曜日・春分の日）
午前十一時より
 - 一、法話
- ・駐車場はありません。
南北線をご利用ください。



落ふのきやらきぶき

松原静子



春は、青々とした落ふのききのおいしい季節です。

わたくしは、この時期になりますと、子どもどものころ、母がよく作ってくれました「きやらぶき」のほろにがい味が懐かしくなり、お鍋いっぱいにつけてしまいます。

落は、小指の太さの三分の一ほ

どの細いものを選び、皮はむかすによく洗って、楊子ほどの長さに切りそろえます。

お鍋には、落がヒタヒタになるぐらいのお酒を入れ、水は使いません。

中火で三十分ほど煮ましたら、好みの濃さで醤油を入れ、さらに一時間半、煮込んで、仕上げに、ミリンを少々。

落の葉や余った落は、ホシイタケを細かく刻み、シイタケのだし汁に醤油を入れて煮たものも、おいしくいただけます。

息子や娘たちのお弁当に重宝いたしました。今は、高校生の孫も、喜んで持ってまいります。